

平成 26 年度
第 3 回在宅医療・福祉ネットワークづくり

テーマ
『認知症について』

日時：平成 26 年 9 月 27 日（土）

13 時 45 分～17 時 00 分

場所：新潟県障害者交流センター
（新潟ふれ愛プラザ） 2 階会議室・研修室

＜ネットワーク事務局＞

新潟市地域包括支援センターかめだ
〒950-0168

新潟市江南区早通 6 丁目 7 番 34 号

TEL：025-383-1780

FAX：025-383-1781

MAIL：hokatu@ijn.or.jp

タイムスケジュール

【受付開始】13:00～13:45

【挨拶】13:45～14:00

開会挨拶: 押木内科神経内科医院 副院長 永井博子 氏

ご挨拶 : 新潟市医師会 16 班長 吉田医院 院長 吉田眞佐人 氏

新潟市地域包括支援センターかめだ

【特別講演】14:00～15:30

座長: 押木内科神経内科医院 副院長 永井博子 氏

「認知症の周辺症状とその対応法」

講師: 白根緑ヶ丘病院 院長 佐野英孝 氏

【交流会(グループワーク)】15:45～16:45

司会: 新潟市地域包括支援センターかめだ

テーマ: 「認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか」

【挨拶】16:45～16:55

～行政から挨拶～

江南区健康福祉課 課長 山田尚子 氏

新潟市高齢者支援課 地域包括ケア推進室 室長 長谷川憲一 氏

～閉会の挨拶～

押木内科神経内科医院 副院長 永井博子 氏

グループワーク

『認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか』

グループ1

- ・ 家族が認知症の高齢者がいることをオープンにする。
- ・ 一人暮らしの方で認知症と疑われる方は、地域包括支援センターや民生委員、区長へ相談する。
- ・ 認知症を理解した傾聴ボランティアが必要。
- ・ 歩いて行ける近い所に集まれる場所がある。お茶も飲めて、地域の人ならだれでも行ける所。スタッフもいる所。
- ・ 近所の世話焼きおばさんに活躍してもらおう。
- ・ 地域でボランティアを養成する。

グループ2

【見守り】

- ・ 地域・自治会で組織を作る。

【声かけ】

- ・ 常に地域の関わりや近所づきあいを行う。声を掛け合う。

【話相手】

- ・ テレビ電話など活用する。遠くの人とも話す。

【治療】

- ・ 薬の認可までに時間がかかるため、もっと早く認可してもらおう。

【いつも通り】

- ・ 病気に対する理解をしてもらう。
- ・ 認知症の方と接するノウハウを教育する。感謝をする。

グループ3

- ・ 積極的に外出できるように地域の方が声をかける。
- ・ 地域のコミュニケーション関係づくりを大切にする。
- ・ 認知症を理解していくための人材の育成が必要であるため人材育成をする。
- ・ いろいろな情報を個人だけでなくみんなで共有していく必要がある。

グループワーク

『認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか』

グループ4

【接し方】

- ・ いつも通り接してほしい。
- ・ 今まで通りの付き合いをしてほしい。
- ・ 「この人は認知症だから」といって関わることをやめないでほしい。
- ・ 特別扱いはしないでほしい。

【病気の理解】

- ・ 認知症の症状や行動などを理解する。

【声かけ】

- ・ 道に迷っていたら声をかけてほしい。
- ・ 毎日声をかけてほしい。「〇〇さん！」

【見守り】

- ・ 新聞などがたまっていたら訪問してほしい。
- ・ 生活で不自然なことがあったら声をかけてほしい。
- ・ 生活で不自然なことがあれば、声をかけてほしい。
- ・ 自宅に診てもらいに来てほしい。

【支援】

- ・ 買い物やごみ出しの支援をしてほしい。
- ・ お薬の支援をしてほしい。

【相談機関】

- ・ 支援してくれるサービスの案内をしてほしい。
- ・ いつまでも地域で生活できるような支援をしてほしい。

【今後の課題と対策】

- ・ 認知症を隠す人もおり、認知症の人を把握できない。
- ・ 認知症の症状を理解してもらい、もし認知症の人がいたら「こう接しよう」と考えてほしい。
- ・ 地域で生活するためには、地域の関係づくり、認知症の理解、そのための学習をする場が必要である。
- ・ 徘徊ネットワークを活用する。
- ・ 相談機関の周知をもっとするべきである。

グループワーク

『認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか』

グループ5

【見守り】

- ・温かく見守ってほしい。

【地域のつながり】

- ・声をかけてほしい。
- ・外に出る機会を作ってほしい。遊びや集まりに誘ってほしい。

【相談】

- ・介護保険、病院等、どこかにつなげてほしい。

【生活】

- ・生活ができているかどうか、食事を摂っているかどうか等、できないことを確認してほしい。

【関わり方】

- ・そっとしておいてほしい。
- ・自分でできることはさせてほしい。子供みたいには接しないでほしい。

【どうしたら良いか】

- ・公民館等で、認知症に対する啓発が必要。
地域の方の理解や情報の共有をすることが必要。
- ・民生委員や住民との関わりも必要。
- ・相談機関の周知が必要。家族の安心や、認知症と表に出さない方が多いため。

グループ6

- ・認知症を受容した上で接してほしい。
- ・認知症を理解してほしい。認知症サポーター養成講座等。
- ・どうかたちで認知症としてわかるのか知りたい。
- ・地域性にもよるが、集合住宅、村等で異なるため地域内での情報共有や協力を得られるようにしてほしい。
- ・特別なことはしないでほしい。
- ・周りから気づける、察してあげられる地域にしてほしい。

グループワーク

『認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか』

グループ7

【本人へ】

- ・ 認知症の理解を深める。若い人や子供に対しても行う。
- ・ 地域で関わっている方が高齢化しているため、若い方にも参加してもらう。
- ・ 地域で支えることが大切なため、本人に町内の行事などに参加し、交流する。
- ・ 本人から近所の人をお願いできるような関係性を築く。
- ・ 地域全体で認知症の理解を深める。早期の段階で関われるよう、「認知症」であることを隠さず言えるようにする。
- ・ 本人ができることやできないことを判断する人が関わる。

【徘徊】

- ・ 元気な時から地域の方と仲良くしていく。
- ・ 認知症であることを地域の人に知ってもらうために何か印を持つ。(ワッペンなど)

グループ8

【身体介護】

- ・ 施設の充実をしてほしい。

【見守り、声かけ】

- ・ 地域のきずなを高める。

【権利擁護】

- ・ 認知症になる前に自分の意思表示をできる仕組みをつくる。

【理解】

- ・ 認知症の周知を行う。
- ・ 子どもの教育に取り入れる。

【相談】

- ・ 相談窓口のPRを行う。

グループワーク

『認知症になったら、地域の人からどのように支えてもらいたいのか』

グループ9

～認知症になったらこれだけはしてほしい～

【優しくしてほしい】

- ・認知症の啓もう活動を行い、認知症の理解を深めていきたい。
- ・若い人が家族にいれば早めに受診できるが、老老介護の世帯にはもっと早めの啓もう活動が必要となる。

【一人にしないでほしい】

- ・話しかけてほしい。助けてほしい。
- ・介護保険を使っている人はケアマネやサービス事業所関係者、病院等に状況を発信できるが、それ以前の状況を早期発見していく！
- ・地域を回ってくれる人の協力がほしい。民生委員だけでは足りない。若い人の協力があると嬉しい。小学校で行われているような地域コーディネーターのようなものとか…。

【認知症になりたくない】

- ・予防したい。進行しないようにしたい。

グループ10

【自分らしさへの支援】

- ・集う場所、高齢者と子供達の交流の場所を確保する。

【コミュニケーション】

- ・他者交流の場を確保する。

【相談・助言】

- ・サービス業者や宅配サービスなどの第三者がさりげなく話を確認する。

【安否確認】

- ・専門家や医療機関の方々がそろっている中、相談に行きやすい環境を整えながら、相談、助言の窓口となれる「場」があれば良い。

【意思の尊重】

- ・本人の意思を尊重しながら、上記を行っていく。

講評 佐野英孝氏より

認知症の場合、本人も家族も周りの人には言いたがらないが、周囲の人から理解してもらえそうな、察してもらえそうな環境になると良い。地域の人も認知症の本人や認知症の方がいる家族に気づくことが大切。

新潟の人は我慢強いので、もう少し自分の気持ちを出していくことが大切だと思う。自分を出せない方に対しては気持ちに気付くことが大切だと思う。

学校や地域の教育の中にも認知症の啓蒙活動が必要である。また、専門職の方々が笑顔やユーモアを仕事に活かせると良い。

挨拶

吉田医院 院長 吉田眞佐人氏より

医療・福祉の関係機関がお互い情報共有していくことが大切。情報共有していけるようにネットワークを作っていきたい。

江南区健康福祉課 山田課長より

平成 23 年度の新潟市在宅医療に関するアンケートでは 40 歳以上の市民の 6 割の方々が在宅医療を希望しており、今後ますます医療と介護の連携が必要である。江南区としても協力していきたい。

椿田病院 藤澤正宏氏より

横越地区でも包括ケアに向けて、10 月から医療・福祉・行政の関係者が集まり地域課題に向けて検討していく。

椿田病院としても地域の在宅支援の取り組みに力を入れながら協力していきたい。

高齢者支援課地域包括ケア推進室 長谷川室長より

新潟市で11月から取り組む「むすびあい手帳」、江南区かめだ圏域では6月よりモデル事業として、関係機関の皆さまよりご協力をいただき試用することで効果的な活用方法を検証することができた。

今後、全市で使用する際には主旨を理解していただき、皆様から也能する範囲で協力をいただきたい。

押木内科神経内科医院 副院長 永井博子氏より

今回で3回目となる会も有意義な会となった。

在宅医療・福祉ネットワークの会は年2回開催し、今後継続していく中で会を発展させていきたい。

事務局より

当日は、皆様におかれましてはご多忙中のところ、ご参加いただきありがとうございました。

事務局で出席者名簿やグループワークにおいて不備があり、ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

